

## 進路指導

【子どもたちは、多かれ少なかれその小さな背中に何かを抱えている。それを知ることにより、自分の無力さが切なくなるが、知らないでその子には寄り添えない】

私達は、クラスの子ども達が、学年の子ども達がみんな楽しく、ケンカやいじめなどなく仲良く生活してくれることを願っている。しかし、私達以上に子ども達自信がそのことを強く願っていることがある。そのことを私は以前担任したYさんから教わった。

私はN中学校で、3年生を2年続けて担任したことがある。10年以上も前なので、その時の生徒たちの名前は浮かぶが、最初のクラスか、後のクラスかを忘れかけている。しかし、このYは忘れない。

彼女には両親がいない。彼女が物心つく前に交通事故でお母さんを亡くした。父親は、男一人で幼子を育てることはできないと、Yさんを母親の親(Yさんのおばあさん)にあずけて、行方がしれない。その後、Yさんはおばあさんの手で育てられた。私がYさんと出会った頃、おばあさんは身体の調子が悪く寝たきりであった。おばあさんと二人暮らしのYさんは、学校が終わるとすぐに家に帰り、夕食の支度や洗濯などをする。もちろん部活動などできるはずもない。

Yさんは、学校ではとても明るい子で、おばあさんとの二人暮らしの淋しさなど決して見せない。もちろん家の事情など語らない。勉強はよくやるし、よくできる。生徒会の役員もした。そんなYさんが、一度だけ、自分の境遇をみんなの前で言ったことがある。クラスの女子がグループ間で対立し、話し合いをした時だ。Yさんは、どちらのグループにも属さない立場であった。話し合いを聞いていたYさんが、発言した。

「私は家に帰るとおばあちゃんと二人だけで生活している。おばあちゃんは声もあまりでないので、話もできない。私は学校に来て友達と話をするのが一番の楽しみだ。お願いだから、みんなで仲良く生活しよう。」

というようなことを言ったのだ。その後女子の対立もほとんどなくなった。

12月になって、進路を決定する時期が来た。Yさんは前々から看護婦になりたいといていた。彼女の母親は交通事故でなくなっている。自分は看護婦になって人の命を救いたい、常々そう言っていた。私は彼女と面接をした。父母懇談会だが、おばあさんが学校に来れるわけがない。他の生徒が全て終わった時間にYさんとの面談の時間を設定した。

「Yさん、看護婦になりたいんだな。高校はどうする？」

彼女は成績がとてもいい。少し遠い公立高校を私はすすめようと考えていた。

「先生、私T高校に行く。」

私は意外であった。T高校は近くにある高校である。

「なぜ？私のすすめる高校の方があなたに向いてるような気がするけど。」

「先生、向いてるとか、向いていないとかの問題じゃあないの。もし私が高校に行っている間に、おばあちゃんの具合が悪くなったらどうするの？電車で通う高校では、すぐ家に帰ってこれない。T高校なら、すぐに家に帰ってこられるから。」

「授業料はどうするんだ？」

「大丈夫、奨学金をもらうことができるみたいだから。」

私は何もいえなかった。これほど教師としての自分の無力さを感じたことはなかった。その後、彼女はT高校に進んだ。私は上伊那の学校に転勤した。数年たってYさんのおばあさんが亡くなったことを聞いた。Yさんは、T高校でも頑張って勉強したようだ。

私はクラスでもめ事がある度にYさんを思い出す。自分の運命をただ黙って受け入れ、人の前ではいつも明るかった。そして誰にも負けない頑張り屋であった。そのYさんはクラスのみんなが仲良く、楽しく生活することを、誰よりも強く願っていた。私は今もってYさんの願うようなクラスを作ることができないでいる。情けない話であるが、クラスや学年で悲しい思いをする生徒が出る度にYさんに叱られそうな気がしてならない。